作者

志賀直哉

明治十六（一八八三）年～昭和四十六（一九七一）年。小説家。

宮城県石巻町に、父直温（なおはる）、母銀の次男として生まれる。父は当時第一銀行石巻支店勤務。明治十三（一八八〇）年生まれの長男直行は満二年八か月で夭折しているため実質的には志賀家の長男として成育する。志賀家は近江国志賀城主から始まると伝えられているが、四代目の直之より相馬藩に仕え、祖父の直道は明治維新までは旧相馬藩の二百石の武士で二宮尊徳の弟子であった。維新後は主家相馬家の家令として財政建て直しの仕事に古河市兵衛とともにかかり、足尾銅山の開発に着手した。明治十八（一八八五）年、東京麹町区内幸町の相馬家旧藩邸の祖父母のもとに移され、実質的には祖父母の手で育てられる。二十二（一八八九）年、学習院初等科入学。二十八（一八九五）年に、母銀死去（その後父は高橋浩と再婚する）。九月、学習院中等科に進む。十八歳頃より内村鑑三の教会に通い、足尾銅山鉱毒地視察を計画するが、父と意見衝突。学習院では二年落第し武者小路実篤らと同級になる。学習院高等科を経て東京帝国大学英文科に進むが後に国文科に転じる、その後中退。大学を中退した明治四十三（一九一〇）年、志賀直哉・武者小路実篤・木下利玄・正親町公和（おおぎまちきんかず）の回覧雑誌「望野」（はじめ「暴矢」、改題して「望野」となる）、里見弴・児島喜久雄・園池公致・田中雨村らの回覧雑誌「麦」、柳宗悦・郡虎彦の回覧雑誌「桃園」の三誌が合併して四月に「白樺」が誕生する。「白樺」は文学雑誌であると同時に美術雑誌でもあり、また、大正文学の出発点となる雑誌であった。初期の作品には「剃刀」「老人」「正義派」「清兵衛と瓢箪」などの客観小説の流れと、自己と肉親や友人をモデルに用いた私小説の流れとが入り混じって展開する。

大正元（一九一二）年九月、「中央公論」に「大津順吉」を発表し最初の原稿料を得た。この年、父との対立がもとで広島県尾道に一時居住。翌二（一九一三）年八月十五日夜、山の手線の電車に跳ね飛ばされて負傷する。十月、後養生のため城崎温泉へ（この年「范の犯罪」などを書き、三年ほど創作を中止する）。三（一九一四）年、父の反対を押し切って武者小路実篤の従妹勘解由（かでの）小路康子（こうじまだこ）と結婚、京都や赤城などにしばらく住む。その後千葉県我孫子の手賀沼のほとりに移住。当時の我孫子には柳宗悦、武者小路、バーナード・リーチや中勘助なども住み、「白樺村」的な雰囲気があった。志賀直哉は生涯に転居二十数回。居住した場所に材を取った名作を発表している。

「城の崎にて」が発表された六（一九一七）年は、三年ほど中止していた創作を再開した年である。また、この年、長年にわたった父との争いが解決している。父との和解の喜びを一挙に書ききった「和解」他、「好人物の夫婦」「赤西蠣太」などを発表し、大正期の代表的な作家となった。広津和郎の「志賀直哉論」もこの時期に書かれており、見るべきものを正確に見抜く肉眼の作家

というイメージが定着した時代でもあった。

その後も短編を幾つも発表するが、十（一九二一）年、長編小説「暗夜行路」が「改造」に連載され始める。この年祖母死去。また「暗夜行路」は前編こそひとまず完結したが、後編はすこぶる難渋し幾度もの断絶を繰り返した。そして昭和十二（一九三七）年四月についに完結。小林秀雄・河上徹太郎・谷川徹三らより賛辞が寄せられた。近代文学史上不朽の名作と謳われる。その間に我孫子から京都、山科を経て奈良へ転居。「雨蛙」「山科の記憶」などの短編を発表した。昭和十六（一九四一）年芸術院会員。第二次世界大戦後は「灰色の月」「山鳩」「朝顔」など簡潔にして奥行きの深い短編を発表した。二十四（一九四九）年文化勲章受賞。熱海から東京渋谷に居を移し、悠然とした晩年を送る。四十六（一九七一）年十月二十一日、関東中央病院にて肺炎のため死去。八十八歳であった。

生前の志賀直哉の周辺には滝井孝作・尾崎一雄・網野菊・直井潔・島村利正・藤枝静男・阿川弘之らが集まり「志賀山脈」を形成したが、その私小説性や伊藤整の言う調和的な「人格美学」的有り様に対して、太宰治・織田作之助らの反発もあった。

文学活動

主な作品を以下に挙げる。

初期短編――「剃刀」「正義派」「清兵衛と瓢箪」「網走まで」など
中期短編――「好人物の夫婦」「赤西蠣太」「小僧の神様」「万暦赤絵」「和解」など
戦後短編――「灰色の月」「朝顔」
長編――「暗夜行路」

作者を解くカギ

1　白樺派

志賀直哉は学習院中等科で二回落第しているが、この落第によって、木下利玄・正親町公和と同級になり、隣のクラスだった武者小路実篤と親しむ機会を得た。そして特に武者小路実篤とは生涯を通じて深いかかわりを持った（志賀直哉の妻は武者小路の従妹にあたり、結婚式は武者小路宅で行われている。また、志賀直哉の葬儀に当たっては武者小路が体の不自由を押して参列し、里見弴一人が弔辞を読む予定だったところ、武者小路の弔辞がその場で加わった）。「志賀直哉が学習院に入学しなければ、また二年落第して中等科六年、十九歳のとき十七歳の武者小路実篤と知り合わなければ、「白樺」は存在しなかった。武者小路実篤は志賀直哉と会わなくとも小説家、実践家となっただろうが、志賀直哉は武者小路実篤との出会いがなければ作家にはならなかった可能性が高い。」（「白樺たちの大正」関川夏央）。志賀直哉は武者小路実篤と出会う以前にも有島生馬らと倹遊会を結成し「倹遊会雑誌」という原稿を綴じ合わせた雑誌を回覧していたが、雑誌「白樺」の創刊に加わったこと、また白樺によった作家・画家・彫刻家・美術研究家・詩人など多くの人と交流したことによって、作家、志賀直哉が生み出されていったと考えられる。

2　父との不和

明治期における国内での大きな社会問題となった渡良瀬川の鉱毒事件の被害地視察に行こうとした志賀直哉は、父親に厳しく反対される（足尾銅山は祖父の直道がその開発に関係していた）。その後、尾道に居を移すきっかけとなったのも父親との対立であり、

また結婚に際しても父親の反対にあい、それを押し切る形で康子と結婚した（康子は先に川口家に嫁していて夫と死別。志賀直哉とは再婚になる。結婚式は媒酌人なし、武者小路夫妻と勘解由小路夫妻が列席しただけであった）。この結婚をきっかけにして父との不和はさらに悪化する。この対立は志賀直哉三十四歳の年に和解が成立するまで続いた。青年時代より次女の出生（長女は夭折）までの長期間にわたって続いたことになる。この対立と和解は小説「和解」として作品化される。志賀直哉は父親との対立だけではなく、肉親や友人とのかかわりや自己をモデルにした多くの作品を残している。自己の周辺を描く私小説的作品は志賀直哉の作品群の中に一つの流れを形成している。その象徴となるのが父親との不和であったのである。

出典

本文は『小僧の神様　他十篇』（岩波書店　平成十四）によった。初出は雑誌「白樺」大正六（一九一七）年五月号に掲載された。作者三十四歳の時である。翌（一九一八）年一月、新潮社刊「夜の光」に収録されるに際して「大正六年四月」と執筆年月が明示される。「夜の光」に収めたときに本文にかなり大きい修訂がなされ、その後、九巻本全集に収めたときにも本文の改訂がなされている。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○「范の犯罪」→『范の犯罪』（教科書一九九・16）〔教育上の配慮〕

○「支那人」→「中国人」（教科書一九九・16）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊**教師用**

○志賀直哉を知るために

「志賀直哉」上下　本多秋五　岩波書店　平二

「志賀直哉」新装版　福田清人・栗林秀雄　清水書院　平二十八

＊一九六八年版の再版

「志賀直哉　芸術小説を書き続けた文豪」宮越勉　おうふう　平三十

○大正時代の雰囲気をつかむために

「大正文学アルバム」（新潮日本文学アルバム　別巻2）　新潮社　昭六十一

「日本文壇史19　白樺派の若人たち」瀬沼茂樹　講談社　平九

「白樺たちの大正」関川夏央　文藝春秋　平十五

○「城の崎にて」読解参考のために

「志賀直哉の短編小説を読み直す」（読み直し文学講座4）島村輝　かもがわ出版　令三

＊桑の木の場面とそれに続くいもりの場面を「黄泉の世界」として読解した一例。

「講義日本文学　「共同性」からの視界」
東京大学文学部国文学研究室　東京大学出版会　令三

＊生徒用

「近代日本文学のすすめ」　大岡信・加賀乙彦・菅野昭正・曾根博義・十川信介　岩波書店　平十一
＊近代日本の小説に対しての評論アンソロジー。志賀直哉は「暗夜行路」が取り上げられている。

「志賀直哉」（ちくま日本文学 021）志賀直哉　筑摩書房　平二十

「志賀直哉はなぜ名文か」　山口翼　祥伝社　平十八

「温泉文学論」　川村湊　新潮社　平十九

「志賀直哉、映画に行く　エジソンから小津安二郎まで見た男」
貴田庄　朝日新聞出版　平二十七

「日本近代随筆選３　思い出の扉」
千葉俊二・長谷川郁夫・宗像和重　岩波書店　平二十八